

兼重社長所有

# 愛車紹介

宮崎専務所有



## Kawasaki 900 super4 Z1B (1974年式)

Z1は1972年から1976年にかけて製造された、総排気量903ccのレジェンド車。ティアドロップ型のタンクからテールカウルへの流れるような美しいスタイリングと、ツインカムならではのハイスペックな走り、瞬間にライダーの心をつかんだ。上の写真は、左が兼重社長のカスタム仕様で、右は宮崎専務のZ1。兼重社長のZ1はさまざまな部品を自ら丁寧に取り付けた。ホイールなど足回りも上品な仕上げを心がけ「見る人が見ればわかる」カスタムに徹している。洗練されたスタイリッシュなカスタムは、生き方にも通じるというポリシーだ。



フレームの補強など、兼重社長自ら細やかなカスタムを施している。



①セカンドカーのNISSAN GT-R(2019年式)。2007年のデビュー以来、独自の存在感あるデザインを基調にパフォーマンスを進化させて続けている。しなやかで上質な大人の乗り心地と、プレミアム・スポーツーツと呼ぶにふさわしい究極の走りを実現。室内の質感と快適性を高め、乗り手を非日常空間へといざなう。



②Z1のほかに、ハスクバーナとホンダのモーターバイク、ホンダの小型スポーツバイクがガレージに並ぶ。

③手づくりしたというバイクガレージの外観。

④バイクカスタムの他にも、50年代、60年代のアメリカンテイストを感じさせる、雑誌やインテリアに惹かれる。ガレージの外観や、自らしつらえたレストコーナー、天井から吊るしたアンティークランプも、懐かしい雰囲気を出している。

⑤ガレージの壁には整備やカスタムに使う工具が並ぶ。



モータード一辺倒だ。ひたすら攻める走り、をめぐしてカスタムする。それを実感するため、平尾台や阿蘇、角島を一人で走る。それでも今は「走るより、イジる方がずっと楽しい」と苦笑する。

心躍る割合はバイク8割、車2割で、いずれも好きなのは70年代の旧車。現在は仕事用のトヨタレクサスLSのほか、日産のGT-RとB110サニーカスタムに乗っており、かつてはケンメリ(スカイラインの70年代名車)や大きなアメリカ車も乗り続けた。

とはいえ、カスタムもやり尽くした感がある、と兼重社長。今、脳裏にあるのは5000坪のサーキット場で「天人がバイクやラジコン、スケボー、Xゲームみたいな遊びを楽しめる場所が欲しい」と目を輝かせる。やんちゃな魂は、永遠に健在のようだ。

# 至福の時間

株式会社兼建 兼重 謙史 社長

重篤をメインに、ブランドの建設・解体工事を一手に引き受ける、プロフェッショナル集団「兼建」の社長、兼重 謙史(45歳)は、設計から施工まで手がけた「ガレージでバイクをカスタムし、至福の時間を過ごす。」

「たにかくイタるのが好き」という兼重社長のかたわらには、タンクとフレームだけの状態からカスタムした、1974年製カワサキZ1。生まれ年と同じ製造年の愛車だ。

カスタムコンセプトは、走れるZ。二見ノーマルのようにも見

えるバランスの良いカスタムは、細やかな技と洗練されたセンスから生み出される。主張の強いカスタムZ1が多い中、兼重社長が創り出す上質な完成美は珍しい。

メグロ(かつての日本を代表するメーカー)のバイクを愛した祖父の影響で、物心ついた頃からスバナが遊び道具だった。捨てられたバイクを分解して遊びながら、構造を覚えた。小学校の卒業文集に記した将来の夢は「レーサー」。

10代後半になると仲間と連れ立って走り回り、今までに乗り続けたバイクは延べ30台。大半は国産車で、海外車はハスクバーナの